

---

# 告白の結果はドーナツ

和紙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

告白の結果はドーナツ

### 【Nコード】

N1004B

### 【作者名】

和紙

### 【あらすじ】

拓の高校入学してからの初の大舞台の告白。友達に手伝ってもらったの告白。ドーナツによって決意した告白。その結果は？告白を題材にしたドタバタ過ぎる物語。

## （前書き）

和紙自身初の短編を投稿しました。

「き、教室って、以外に広いんだな」

もう間近だろう…。自分の高校生活始まって以来の大舞台開演まで。それなのに、訳分かんない事を口走る自分ってどうなのよ。

一向に、ミスター心拍数は俺の体を揺るがしている。

「拓<sup>たく</sup>何言ってるの？落ち着けよ」

右隣の机で頬杖について大親友（いや大悪友）の松がニヤけてる。

こなクソ！松の野郎楽しみやがって。彼女持ちだからって余裕かよ！！

そんな余裕を見せているコヤツには、天罰を与えねば！

「聖蘭高一年二組、掲示委員会の貴公子こと、長谷川拓いつきまーす」

「は？」

俺は、高らかに宣誓し目をパチクリさせる松に襲いかかり、勢い良くこめかみに両拳をドリル状に捻込んだ。

悶絶する松。

その顔に少し快感を感じた。

いや、すっげえ快感を感じた。

この眉のグネリ具合がなんとも言えない。

「ちょ待てって、お前だつて帰りには…痛い、彼女持ちかもって、だから痛いって、彼女持ちかもしれないだろ」

その《彼女持ち》って言葉に俺の想像がピンクの煙を吐き出しながら膨らんだ。

もしOKだったら今日から二人で同じ道を歩いて、でもお互いまだ照れてて、無言で歩く中で偶然に手が触れちゃって舞ちゃんが

「あつ…ごめんね」て小さく洩らして、そんな可愛い声に俺は更に照れちゃって下腹部のマイ遮断機も激しく点灯しちゃって、萌え死にしそうな俺が、

「手繋ごうか…」

って照れながら言つて、舞ちゃんが小さく頷いて…そんでそんで…。

「あーあ、まだOKって言われて無いのによくそんな下ネタ交じりの妄想が浮かぶよな。薔薇色の脳味噌が羨ましい」

俺の想像をぶち壊すかの様に松が吐き捨てた。

ふっふっふっ…松よ、開けたな。

開けてはならないパンドラの箱を開けちゃったな。

「よーし！俺に数時間後に訪れるであろう現実の予行演習を邪魔しちゃヤツには…少し逝ってもらっぞお！」

俺は、とびっきりの萌えスマイルで再び松のコメカミにドリル攻撃

を喰らわせてあげた。  
さつきよりも少しつ・よ・め・に・ね。

数秒後、机に突っ伏して痙攣している松を視界にいれずに、俺は舞ちゃんの事を考えた。

矢坂 舞。

通称、舞ちゃん。

聖蘭に入学して間もない純粹ボーイ俺を、虜にした女神。

しかし、幸せそうな顔で痙攣する松も、俺の為に部活中の舞ちゃんを呼びに行った濱も口を揃えて、

「お前！あのミクロ星人のドコが良いんだよ」

って言いやる。

うつせえ！ミクロじゃ無え！

まあ確に、ちっちゃいケド…俺の目から見れば誰よりもデッカイね。  
存在がさ。

今でも、忘れないぜ。初めて掲示委員の仕事で二人で掲示物を持って校内を巡ったあの日を。

グダグダと文句を垂れ流す俺の隣、小さな両手の中いっぱい荷物を持つ舞ちゃんの一生懸命な顔。

俺が無愛想に荷物を持ってあげた時の喜んだ笑顔。  
その笑顔見てたら、何かすっげえ照れちゃって。

柄にもなく、めちゃくちや仕事を頑張っちゃって。

この子の為なら、俺は何でも出来るって思えた。

それ以来、俺は舞ちゃんの笑顔が見たくて学校だって、委員会だって無遅刻無欠席じゃ！

聞いてんのかよ松！濱！

って、二人には昼の図書館秘密会議でいったんだった。

それに、この前のＢＢＱでもらった舞ちゃん手作りのドーナツ。あのドーナツで俺の告白は決まったね。ずっげえ美味くて、母さんの料理の張れるぐらい美味くて。

俺以外の男に食わせたくないね。

舞ちゃんのドーナツは、俺だけのモンだっうの。

そう思ったから、今日告るんだ。

悪いか？松に濱！

って、昼に口が酸っぱくなる程言っただんだけ。

「ふう、久しぶりの痙攣も悪くないな」

俺が、自分自身にツツコミを入れた瞬間、いきなり松がガバツと机から起き上がったもんだからビックリだ。

ビビる俺に一瞥を投げて、松が携帯を取り出し会話を始めた。

「あ、分かった。じゃ待ってるぞ」

数秒の会話の後に携帯は役目を終えて、再びポケットにしまわれた。多分会話の内容から濱からだと思われる。

電話を終えた松が真剣な顔をして俺の目を見た。

「なあ拓：実は」

「ま、まさか告白する前に振られたとか？」  
何か、心臓がすっげえドギドキ言ってる。

「実は：俺は霊超類ヒト科だ。そして、一つ言うなら稀にみる美男子で彼女持ちだ」

「いやボケとかいらなから：早く内容を」

「何故、罪深き人間は、更に罪を重ねるのだから：。人間こそが社会悪の元凶で、人が滅びれば罪の定義も消え、幸せが平等に訪れるのだろうか：えっ、そうなんだ：トムは、バターが作れるんだ」

「だからボケとか要らんで！っつか、前半部分の人間の存在と後半のトムのバターって関係無えだろ？それより、早くタクコに電話の内容を言っによ」

「濱から舞と合流したって電話だ。って事は、もう告白まで間近だな」

ああ…今の俺の萌えっコネタにツッコミ入れて欲しかった。



つてかちよ、ちょい待ち！  
今何て言った？もう間近？

まるでエコーがかかったかの様に、松の言葉が俺の頭に響き渡った。

つて事は、すでに舞ちゃん俺の元に向かつてる？  
つてかも俺の初告白の大舞台！？

再び、ミスター心拍数が暴れだしやがる。

心拍数の上昇と共に不安が頭をかすめた。

も、もしNOだったら今まで通りに会話出来ないのか？  
何か、お互いヨソヨソしくて、クラスに居づらくて。  
顔もマトモに見れなかったり？

委員会の仕事だって…。

「もう覚悟は決まってるか？」

松が、穏やかな目で笑った。

「決まって無えよ。すっげえ怖いぜよ。つてか何で嬉しそうなんだよ！」

「怒んな。実際に嬉しいんだよ」

「はあ？いきなり何だよ。持ち悪いいな…」

何か、男に嬉しいって言われるとキモいな…実際。

「小、中学の時は、お前いつもつまらなそうな顔をしててさ、何事にも不満ってヤツか？でも、聖蘭に入って舞に出会ってからはいつも楽しそうで…うっうっ父さんは嬉しいぞ」

「松：今日ノリ良いな…。いや、父さんか。ありがとう」

「誰が父さんだ。腐れ外道が！」

「ほお…。腐れ外道のソフトタッチ味・わ・う・か・い？」

俺が、笑顔で拳をグルグルと高速で回すと松が手をスリスリさせて謝った。

「とにかく怖がる理由なんて無いだろ。図書館で俺と濱に言った真っ直ぐな気持ちを舞に伝えれば良いんだ。お前のボケ無しの真剣な言葉なら絶対響く」

「伝わるか？松先輩、何か微妙な気がしますが…」

俺のイメージ上、男の告白は甘い言葉とマウスと。マウスだ。

「このバカ小市民が！男はな、好きなら好き。気持ち良いなら気持ち良いだ」

は？

松：今とんでも無い事言わなかったか？  
気持ち良い？

それって明らかに…。

慌てて口を押さえる松。

コイツ、何か隠してんな。

「とにかく、真っ直ぐな気持ちを伝えろ！良い…」

その時、松の言葉を遮るかの様に濱が扉を勢い良く開けて駆け込んできて、すぐに扉を閉めた。

「よお！十分振りだな。頼まれてた舞姫を連れてきたぜ！今俺の背中  
の扉一枚外で、少し待たせてあるぜえい」

濱は、グイっ親指を立ててニカッと笑う。

ははっ！松に負けず劣らず濱も楽しそうだな。

何だかんだ言つて、松の言葉や濱のお陰で大分落ち着いてきたし、  
恐怖心も吹き飛んだ。

「拓ちゃん、準備は？」

「俺に準備？そんな言葉は俺の辞書に載っていないな」

「さっすが、拓ちゃん。嘘と虚栄で出来た男」

「俺も濱の言葉に一票を投じたい」

うーん、君達は大舞台の前に俺の心を砕くつもりかな？

ここで泣き叫んでも良いんだぞ。

「じゃ、拓ちゃんが奏でる告白と言つ調を待つ舞姫を、扉の外からこの開場に招待するわ」

そう言うと、静かに濱が扉を開けた。

目の前に俺の小さな宝物が首を傾げて立っていた。

「あ、拓君だ」

俺の顔を見てニツコリと微笑む宝物。

この笑顔を俺は手に出来るのかな？

いや手に入れるんじゃない。

手を繋いでいたいんだ。

優しく繋いでいたい。

「それじゃ、俺と濱は出るわ。拓：お前なら上手く伝えられる。俺が保証するぞ」

「そつだよ。大丈夫だ。あつと、手伝つたお代は、手作りドーナツでヨロシクね」

「ありがとな…松、濱」

そして、俺の大舞台の幕が上がった。

「ドーナツ？ふふつ、あの二人もドーナツが大好きなんだね。さすが仲良しさん」

二人が出て行き、扉が閉まると舞ちゃんがニコニコと笑う。

「うん…俺達はドーナツが大好きなんだ。それで今日、舞ちゃんを呼んだ理由はね…」

なあ、濱と松。

俺は、この大舞台上で上手く、真っ直ぐに言えただろうか。

いや上手く行ったかどうかなんて誰にも解んないか…解ったら恋や告白なんて詰まらないモノだよな。

分かった事は、友達の有り難みと真っ直ぐな気持ちの大切さか。

f i n

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

気付いた方も居ると思いますが、この短編は今連載中の作品に少しリンクしています。

どう影響するかは、まだ言えませんが…（苦笑）

感想やコメントをお待ちしています。

では！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1004b/>

---

告白の結果はドーナツ

2010年10月16日00時46分発行